あれから50年　　静岡市静岡遺族会　丸山千代子

父が戦死したのは母が24歳の時、幾多の苦難の道をたどりながら、もう早いもので喜寿を迎える年になりました。

私の父は南方の「ニューブリテン島」赤道直下の大変暑い所で熱病に冒されながら戦い、戦死しました。私が3歳の時です。妹は7カ月位だったそうです。

私には父との思い出はほとんどありません。ただ1枚の絵の様に覚えていますのは、ガランとした家の中で父と2人火鉢を囲んでいたのを覚えています。母に話しましたら、その時は戦地に発つ時で、農家は稲の脱穀で一番忙しい時だったそうです。母も一緒に居られなく、心残りだったと思います。

あとはっきり想い出の中に残っていますのは、頭上に敵機一機、B29が姿を見せ飛行機雲をひき西方に飛び去って行く。小学校一年生。空襲警報が発生するたびに学校からいも畑を走り家に帰るのです。その時は、集団下校をするんですが、父親の居ない私はいつも一人で泣いて家に帰ったものです。夜には防空壕に入ります。静岡市内に焼夷弾が落とされますと南西の空が燃えてしまうのではないかと思う程真っ赤になりました。

そのうち兵隊さん達が家のお風呂に入りに来る様になりました。よく色々な話をしてくれました。それから間もなく終戦になりましたが、当時は父親のいない子供はよくいじめに会いました。物不足の折でしたので、教室で何かなくなると取らなくても取ったと言われ「片足でもいいから父に帰ってきてほしいとどんなに思ったことか。」それから親子3人で頑張ってきました。

新聞など読みますと政府は日本が全面的に悪いのを認める様な発言をしたり、外国へ行けば無名戦死者をお参りしたりしますが、あの当時国を守って多くの人が戦死したのに靖国神社へのお参りはなぜしないのか。赤紙一枚で戦地に送り出され帰らぬ人となった人達はどんなにか悔しいと思います。

あれから50年。消え去りつつある空襲、戦火、2度と再びあってはならないと思います。　　（平成12年発行「噫呼お父さん」より）

報　恩　感　謝　　静岡市静岡遺族会　斉藤守代

平成7年3月26日、「白寿を迎えて」という自伝を出版いたしました。その中から「戦後の苦しかった思いで」を抜粋させて戴きました。

私は、明治30年8月28日静岡市安西5丁目5番地に出生し、本年99歳で元気に白寿を迎え喜び一杯でございます。なぜ99を白寿と言うのか、白は「百」の字から一をとったかたちであることから白寿と言うそうです。

19 歳で腕のいい蒔絵師と結婚し、20 歳で長女を出産、以後 20 年間に 12 人子供を産み、弟子が 4・5 人も居た時期もあり、その上に姑の世話、大勢の子供達の世話も満足に出来ず、三度三度の食べることに追われ全く目のまわる毎日でした。

長男が家業に就き、長女・次女も外へ働きに出るようになった頃、世の中は段々慌ただしくなり戦争が近付いて来ました。物資も急に統制になって、蒔絵の仕事も少なくなり、その上材料を集めるのも大変になりました。とうとう戦争が始まり、昭和 18 年長男（栄作）22 歳の時召集令状が来て軍隊にとられました。当時弟子 2 人にも暇を出し、急に家の中が淋しくなりました。それでも主人と私、子供達 8 人、計 10 人の大家族は並大ていではありませんでした。

昭和 19 年太平洋戦争は益々激しく、北方南方の各地で玉砕のニュース。内地の大都会は空襲の毎日。静岡もいつかと心配されましたが、昭和 20 年 6 月 19 日夜とうとう空襲にあい、私達一家も命からがら逃げ迷った時は生きた心地がしませんでした。皆様も同じ思いをされていると思います。主人は爆弾の破片で頭に重傷を負いました。私は子供達を大声で呼び集めて、逃げるのに精一杯です。安倍川を越え藁科川を越え、振り返ると静岡の町は火だるまでした。吉津までたどりつき全員の無事を確かめた時、体中の力が抜けてへとへとでした。丁度そこにお寺があったので、住職さんにお願いして休ませてもらいました。外にも 2、3 の家族が同じように逃げて来ていました。ご住職や奥様のご好意で、それから暫くお寺の本堂の一隅を借りて住みつくようになったのです。

悪いことは重なるものと申しますがその通りで、長男の戦死公報が入りました。サイパン島で玉砕です。主人と私、只ぼうぜんと公報を受取りましたが信じられませんでした。主人の頭の傷もひどく、薬らしい薬もなく治療は大変でした。

焼け跡の防空壕からわずかな食物と鍋釜をやっと探しだし、配給されたジャガ芋だけの生活です。着たきりで着替えもないし、布団も紙で出来ている大きな袋のようなものを手に入れて、みんなでゴロ寝でした。私は必死であちこち歩き回り食べるものを探し集めるのに苦労しました。幸いタンス 2、3 本を知人の家に疎開しておいたので大助かり、しかしそのタンスの中身は大半お米やお芋に化けて食いつないできました。

やがて終戦となり、主人の仕事先の問屋さんが、焼け残った倉庫の 2 階を貸してくださり、やっと落ち着くことが出来ました。戦争中から敗戦までのさまざまな苦難は、皆様方も全部体験されていると思います。もっともっと苦しい

体験をされている方から比べれば、私の苦労など苦労ではなく、むしろ当たり前かも知れません。

昭和 22 年、問屋の御主人のご好意で鷹匠町の土地を貸してくださり、そこにバラックながら我が家を建てる事ができました。まだまだ周りは焼け跡の空き地がたくさん在りました。バラックとは言え人並みに家を持てた嬉しさは忘れられません。

まだまだ戦後の混乱が続いていた時ですから主人の仕事は無く、収入もなく困っていた所、ある人に勧められ商売をすることになりました。当時闇市と言われた七間町に、露天商となって屋台を作り、履物を売る店を出したのです。私も店を手伝いながら、荷を背負って行商に出るようになり、よく歩きました。市内は勿論のこと、遠く牛妻の方面まで足を延ばし売って歩きました。今考えると、女の足でよく歩いたものだと自分で感心しております。今日まで丈夫で来たのも、あの頃足腰を鍛えておいたのが良かったんだなと思います。

皆様方も若い内に体を鍛えておいて下さい。年を取るにつけそう思います。

〇夫に仕え 12 人もの子を育て、白寿迎えて今日の歓び

〇白寿迎え百歳越えて茶寿皇寿迎え給えとひた祈るかも

（平成 12 年発行「噫呼お父さん」より）

短　歌　「　波　の　は　た　て　」　　静岡市静岡遺族会　為貝たか

やうやくにたどり来しニューギニアの野の果てに君在すごと仏桑華咲く

ニューギニアの大草原を焼く野火のけむりの中に若き夫顕つ

一握の砂一椀の水おろそかならずニューギニア島夫眠る島

丈余なす草原となりし飛行場跡にいまだ放置の戦闘機残骸

あやしげな英単語ならベカナタ族よりようやく購ふ木彫りタンバラン（守護神）

ニューギニアの土にて焼きしまろき壺耳を寄すればとほき海の音

機窓より蛇行果てなき大河見ゆ夫眠る国はるかとなりぬ

生きている父を欲しいと駄駄をこねし子は 51 歳とほき戦い

子を負ひて玄界灘を帰り来し 25 の吾の若くありき

ビタミン剤母体に良しと記しあり軍事郵便の文字はうすれて

戦争はあんなものではないと思うビルマの竪琴孫と鑑賞す

韓国へ三度びパプアへ再びを訪ひし遂に夫に逢はざり

仮の日ながら迂闊に過ぎし秋の忌日幾度めぐるわが契の日

南溟に果てしとのみに 40 年 50 年をも待ちて終らむ

君の背に寄り添ひて聴きし玄界灘の冬濤の音耳にひびけり
わだつみの波のはたてに君在ますまどふことなく 50 年を過ぐ
三度わが訪ひしパプアの密林にいちにんの声遂に聴かざり
露ふふむ芝生にいねて時ながくサザンクロスをあふぎしかの夜
ゆったりと寄せてくる波は波を追い光りて椰子の根方を洗ふ
携へ来し卒塔婆ねもごろに納めたりコスモスゆるるパプアの御墓辺

戦没者　陸軍少佐　為　貝　超　禅
昭和 19 年 10 月 19 日
東部ニューギニア　ボイキン付近に於いて戦死

（平成 12 年発行「噫呼お父さん」より）

短　歌　「　惑　　星　」

杳きソールよ共に仰ぎし葉月の雲に遅速のありて君今はなき
玄界灘を越えて征きたる君なるに領巾(ひれふ)振れざりき昭和かの年
ニューギニアに征きませし君の好みたる「日日是好日」我は清書す
陰膳とふ言葉ひそひそよぎりゆく蝉の声とぼしき冷夏八月
おもむろに立ち上がる雲けものめく 12 月 8 日風もあらぬに
新年になれば復員が始まるらしい・・・あれから待ち待ちし 60 余年
君が代に戦(いくさ)はありき君の為きみは征きたり夕茜雲(ゆふあかねぐも)
清水(きよみず)の舞台を脇にしてすぎしわが 60 年か日照(そばえ)雨ふりくる
「南海の父に逢へたでせうか」その母の訃報に添ふる子よりの便り
土産には塩が一番とニューギニアの戦跡巡拝団奥地へ向かふ
ニューギニアより生きて還りし尊き命(いのち)鬼籍に入りしと聞く秋の夜
たたかひは遠きにありと思ひゐしに自衛隊の靴音空(そら)耳ならず
大東亜戦争歴史の中に編まれたり年代表を子等は暗記す
賜はりし余生さやかに過ぎゆかな 88 歳日日やすらかに
手をつないで・・・それは良いけどわが君は何億光年光の惑星
弟よ
勲章も供ふるなくて魂棚(たまだな)はただ姉妹(はらから)の憶ひにかざる
家中を追ひかけつこせし弟の面輪(おもわ)顕ちくるとほき夕星(づつ)

（平成 20 年発行「噫呼お母さん」より）

涙　　雨

静岡市静岡遺族会　黒瀬良夫

戦跡慰霊巡拝のことをＡさんから知らされてから数年の歳月が流れた。そして、待ちに待ったフィリピン行きの大型ジャンボ機の機内にいま私はいる。Ａさんからおくられた写経を胸のポケットに、膝に抱くリュックには、母の遺骨の小片が真綿に包んで入れてある。

レイテ島のタクロバン空港に到着したのは８月24日午後３時50分である。そのままブラウエンの慰霊地を訪れたので、宿舎に帰ったときすっかり暗くなっていた。

ここで私たちは思いがけない人物にお会いすることになった。20数年間英霊の収骨を自費で進められている千葉県の山下伸一氏と、この道を共に歩む東京都の間宮春生氏である。山下氏は旧日本軍の生き残り兵、間宮氏は大岡昇平著「レイテ戦記」の編集者で、共に70歳、毎年島民の家に泊り、島民からの情報を唯一の手掛かりに山野を歩き巡るのである。数々の信じがたい事実を見てきたお二人は、いま霊の存在を固く信じている。両氏の部屋には収骨されたばかりの遺骨と遺品が大きなダンボール箱２つに納められ、線香の香がたちこめていた。

山下氏はすでに1,000体の御柱を収骨されたという。宿舎のうす暗い電燈に照り出されたお二人のお姿は生き菩薩そのものだった。

夜が明けて25日、レイテの空は薄い灰色の雲で覆われていた。フィリピン特製のジープニィに揺られて道路わきの椰子の葉でつくられた家々を見るにつけ、島民の中に兄が生きているかもしれないと思ったりしたが、この島で老人達の姿を見かけることはほとんどなかった。そのかわり地から湧いたように、どこでも子ども達の元気な姿を見ることができた。

かつてレイテは戦火でとだえ果て、新生レイテがいま生まれつつあるように思われる。

それにしても私の兄はこの島の何処で昇天したのだろうか、そして私の抱く母の骨はどこに埋めたらよいか、迷ったあげく私は生前の母が湿気を嫌ったことを想い出し、カンギポット山裾の小高い丘の上の第一師団戦没者英霊之碑の傍らに骨を埋め、郷里から持参の水をその周辺に撒いた。ふと前方を見上げるとカンギポット山が青黒い頂を雲間に見せていた。

すでに１時間ばかり前から振りはじめていた霧雨で木々の葉はしっとりと濡れうなだれていたが、慰霊祭が終わると空は嘘のように晴れわたり南国の太陽がまぶしく輝きはじめた。

その夜の宿舎で、「あの霧雨は、涙雨なのだ」自分に何回も語りかける私だった。

・母の骨レイテに抱き兄眠るカンギポット山に埋めむとす今
・焼香のわれら見つむる墓守りの島の老女の瞳やさしく
・いまもなほ遺体探せる往き菩薩山下伸一氏とレイテにまみゆ
・暑き夜は道端に佇み涼をとる清き眼をもつレイテの子らよ
・物売りのバス叩く音フィリッピンの悲哀こもれりうつむきて聞く

（平成 12 年発行「噫呼お父さん」より）

父よ母よ戦争のない時代に生まれかわって　静岡市静岡遺族会　中山淳次

私の父は、4 回程出征を繰り返し、家に居る事が少なかった。母は留守を守り、子供を育て、懸命に働いた。

母の実家の弟達は、人一倍体格も良く、頑強な体軀であった。当然軍隊に召集され、二人共相次いで中国戦線で戦死した。

下の弟は、故郷を出てから一年も経っていなかった。

そしてあの大きな体の叔父が、小さな白木の箱に納まって帰って来た時、祖母は遺骨をしっかり抱いて、いつまでも嗚咽していた。当時小学生であった私も、今でも脳裏に焼きついている。

そして苦しい戦いは終り、日本国中焼野原になっても平和は戻って来た。

音信の無い父であったが、必ず生還するという思いは変わらなかった。その思いも空しく、終戦の翌年悲報は届いた。ルソン島の山中で、空爆と、全く食糧の無い中で、日本兵は殆ど亡くなって逝ったとか？

当時 13 歳の私は動転し号泣するのみであった。

母の思いは想像に難い。食事も採らず、一週間程伏していた。実弟二人を失い、又父も帰らぬ人となった思いは如何ばかりであったろう。

然しその悲しみと苦悩を乗り越えて、子供達の為に立ち直ってくれた。それから母の戦いが始まった。農家とて、病弱な祖父と、母が中心で、米、麦、芋等、お上への供出という名の賦課は厳しかった。自家用の米はなくなり、麦に芋の入った食事が常食だった。

そして 30 年、ようやく生活も落ち着いた昭和 55 年、「戦争はいやだ」が口癖だった母は、苦闘の一生を閉じた。終戦 1 ヶ月前の 7 月、父が逝って 33 年目の同じ 7 月の暑い日であった。

戦争という過去を、歴史の遠い物語としてのみ知る現代の若い人達に、戦争

の惨禍と平和の尊さを語り伝えて行く事が、私共の責務であると思う。

南の島から渡り鳥の背に乗って来た父の魂が、子供達、孫、曾孫達の幸せを見守ってくれている様な気がする。そして何よりも喜んでいるのは、戦争のない故里の姿であろう。

父よ母よ、今一度戦争のない平和な時代に生まれ変ってほしい。

（平成 20 年発行「噫呼お母さん」より）

母の「三回忌」を前に　　静岡市静岡遺族会　西澤宣二

一昨年の秋も終わりに近い 11 月の末、95 歳の波乱に満ちた生涯を閉じた母の三回忌を間近に控え、遺品の整理を漸く手掛けようとしている。

静岡大火、空襲と立て続けの被害に遭ってきた我が家に、思いもよらず戦前の父と母のアルバムが見つかった。大火の時は持ち出し、空襲の時は生家へ疎開させたであろう母の唯一の嫁入り家財の箪笥の一番下の引き出しに 3 冊、しっかりと風呂敷に包まれていた。私が初めて見るアルバムであり、初めて見る写真が殆どである。その中の父母の結婚式時と家の前の路上で並んで写っている 2 枚を仏壇の置かれている居間に掲げてある遺影にそれぞれコピーして収めた。

母は、志太郡東川根村（現榛原郡川根本町）の、隣家まで 100m 以上離れ、たった 4 戸の山間部落の 9 人兄弟姉妹の 6 番目 4 女として生まれた。山間僻地の貧しい大家族故に、幼少の頃より親類の子守として預けられ、尋常小学校卒業と同時に遠縁に当たる静岡の洋服仕立て屋に女中奉公する身となり、後に洋服仕立て職人として奉公していた父と結婚（昭和 11 年 4 月）し私と妹を儲けた。

父は昭和 11 年夏横須賀海兵隊に配属、志那事変に参戦し 14 年に帰着、17 年 1 月再び横須賀に召集され、4 月（妹が誕生する 5 日前）に佐世保より通信兵として輸送船に乗り、11 月に船諸共海の藻くずとなった。

以降、幼い二人の子供を抱え母の苦悩は始まった。静岡大火より漸く立ち直りかけた矢先の事であり、そうこうしている内に空襲が激しくなり、私達は一旦母の生家に仮疎開した。静岡大空襲の 3 週間前のことである。静岡の家は焼失し、帰り住む処の無い私達は、母の姉の嫁ぎ先の穀物倉（みそ部屋と呼んでいた）の床にむしろを敷き寝起きをさせてもらった。母は生計を立てる為、日中は山仕事、茶摘、畑仕事の手伝い、夜は裁縫の経験を活かし、近隣の人達に頼まれた縫い物や繕い物にと明け方近くまで働いて居るのを見た。食糧難の時

期、分けてもらえる物も無く、豆糟、芋類ならマシのほうで、さつま芋のつる、木の芽までも口にしたものである。

数年経って母は発送電会社の雑役婦として雇ってもらい、何とか生計を立てる事が出来た。その後電力会社の寮賄婦として 60 歳まで働き通した。その間再婚の話も幾つかあったようだが、その都度「うちの人はきっと帰って来る」と言いながら私達兄弟を育てて来てくれたのである。

そんな母の姿の内、私の脳裏にはっきりと残っている最も旧い記憶は、父の戦死の公報を持ってきた祖父と偶々来ていた母の妹と三人で大泣きをしていた姿である。爾来母の涙を見た事が無い。どんな時もにこにこと笑顔で、人の言う事には必ず耳を傾け争う事無く、人の嫌がる事にも避けて通らず、愚痴一つ聞いた事無い。人との出会いを大切に感謝・感謝の一途であった。

朝夕、英霊となった父の御霊の神棚と父の位牌を祀ってある仏壇に向って手を合わせ「今日も一日生かさせて頂き有り難う」と拝んでいる姿は、私の脳裏にある最も新しい母の記憶である。

88 歳、89 歳と立て続けに左右大腿部上部骨折のため没するまでの約 5 ヶ年は歩行の全く出来ない生活であったが、介護する私に気を遣ってか、デーサービス・ショートステイにも喜んで行ってくれたものである。

しかし、私には不思議に思えてならないのは、亡くなる 4 日前の朝、5 泊のショートステイに出掛ける時だけは、「今日は行きたくない」と言い、施設でも食が進まないと介護士より報告があり、2 日前には夕刻私を呼び寄せ、私に「色々と有難う」と言い、「これでご飯が食べれる」と私に向って手を合わせた事である。

来月には、親戚縁者に出向いて頂き「三回忌」の法要を営む事としている。国の為とは言え、若くして尊い命を散らした父達の英霊、戦中戦後の苦難の時代を生き抜いて来た母達に、顕彰と感謝と供養をする事、あの忌まわしい戦争の悲劇を絶対に起こしてはならないと、今何不自由なく平和な生活をしている私達が、子供達や孫達に言い伝え行く義務があると思いを新たにして、朝夕神棚・仏壇の水替え・掃除、神に拝礼。釈迦如来・父母の位牌に向って般若心経他の読経を欠かさず、週一回の墓参には孫達も同行してくれている。最近では息子と孫二人も声をあげて読経をしている。

合　掌　　（平成 20 年発行「噫呼お母さん」より）

周りの皆に助けられて　　**静岡市静岡遺族会　渡辺タキ**

18 年 4 月 4 日が私の結婚式でした。結婚式といっても身内だけで三々九度の盃を交わしただけでした。その披露宴の最中に警戒警報が発令され、大変でした。花嫁姿のまま静岡市内の中町から電車に乗り鷹匠町に帰りました。丁度其の日朝から雨が降りそれは大変でした。

19 年 1 月に主人が戦地に転勤となったのですが私のお腹に子供があったので私は静岡に帰ってきました。そして 7 月 28 日に長男が生まれました。

20 年 6 月 19 日のいまわしい静岡の空襲です。それは大変でした。防空壕より逃げた方がよいと思い、母が息子を抱いて清水公園の山に逃げました。山の上で見ていると飛行機が頭の上を旋回していましたが、その内に焼夷弾が落ちてくると思って見ていると、落ちた所に赤い火が燃えひろがっている。落ちて「パッ」と明るくなりそこが燃える燃える、辺り一面明るくなり昼間の様でした。本当に全部焼けてしまったと思いました。

丁度それは 15 年 1 月 15 日の静岡大火と同じ様に空は真っ赤っかでした。家に帰ったら皆焼けて石の門柱だけ残り、あたり一面焼け野原になり、何もありませんでした。そして家の防空壕の中で父が死んでおりました。

父を焼くために、担架に乗せて安倍川の川原に持っていきました。本通りには黒焦げの死体がごろごろしていてトラックに乗せて同じ様に川原で焼きました。本当に人間の形をした炭でした。

戦争中は、主人の給料を頂いておりましたが、終戦で恩給は停止、幼い長男を母親に預け工場で働いたり、保母の傍ら深夜まで内職したこともあります。

主権回復後の 27 年遺族援護法が施行されて翌年には恩給法が改正され、停止していた軍人恩給や公務扶助料が復活、しかし当初は金額もわずかなので納税勧奨員、病院調理師として働き続けました。「公務扶助料」は本当に欲しい時にもらえなかったので座り込みもしました。

色々な事がありましたが、私は自分の母親が側にいて息子を見てくれたので働けました。本当に感謝しております。いつも母に有難うでした。

（平成 20 年発行「噫呼お母さん」より）